



ひぐらしのなく後 も



木花もみじ

沙都子の目尻に浮かぶものが何か、僕は知っている。

これは涙だ。

そしてにーにーというのは僕のことだ。僕に助けてを求めて沙都子は今日も床を這いずり、カーテンを引きちぎりそうなほどに握り締めてガタガタと震えている。

僕に伸ばされる手、それはいつも鮮明に、ああ、手を伸ばして掴んであげなければいけないのに、どういことか今日はとてもぼやけて見えて・・・ああ、ああ、、・・・ああ！

「どうしたのですか？悟史」

「梨花ちゃん・・・」

ふとした油断したから授業中に眠ってしまうことはよくあった。その都度起こしてくれるのは引っ越してきたばかりのレナという子で、僕は口の端についた汗とも唾液ともわからない液体を乱暴に拭いて、ありがとうと声をかけるのがいつものことになっていた。

今日に限っては沙都子の親友である梨花ちゃんが声をかけてくれて、僕を心配そうに見ている。

「かわいそかわいそなのですよ、どこか苦しいですか？」

そうやって僕の頭を撫でる梨花ちゃんの手は温かい。でもその目は僕の苦しみが当たり前のように見えていて、そしてそれがもうすぐ終わることを知っているようなそんな冷たい目だった。

「平気だよ。ありがとう」

沙都子と似たような歳なのに、梨花ちゃんは時々とても大人びているように見える。

違う、沙都子が本来の歳より子供すぎるのかもしれない。いや。僕が大人すぎるのかもしれない？そんなことを考えているこのことですらすでにもう愚かにさえ感じる。

本当ならもっと楽しく過ごせる時期を、沙都子は逃してしまったただけなんだ。だから上手に自分の考えを表現できずに損をしているだけなんだ。

そして僕はそんな沙都子のたった一人の肉親なのだから、守ってあげなくちゃいけないんだ。

僕しか沙都子を救ってあげられない。僕しか守ってあげられない――。

「もうだめなの？」

「あうあう、今回は圭一の引っ越してくるだいが前に時が巻き戻ったのです」

「そう。じゃあ私が殺される前だいが時間があるってことね」

「まだ梨花が殺されるって決まったわけではないですよ」

「でも悟史の心はどうにもならないところまできてるわね」

「あうあう・・・今日は詩音が魅音と入れ替わってその・・・沙都子に手を上げた日なのです。皆とてもギスギスしている、嫌な日なのですよ」

「そう・・・じゃもうだめね、・・・圭一が引っ越してきてくれるまで待つしかない、か」

「梨花、そんなこといわないでほしいのです・・・」

いつもなら四年目の祟り、沙都子の叔母が殺される事件が起きてからの綿流しの数週間前に巻き戻っていたのに、久しぶりに悟史がまだ時間へと巻き戻った。前回の世界でもだめだったのだ。所詮は袋小路、誰が自分を殺しているのかわからないままこの迷宮へと今宵も紛れ込んでいる。

スタートはこの雛見沢で古手梨花という生を受けてから。そしてゴールは綿流しの日に死という終わりを迎える。でも私はまた同じときを、生を受けて繰り返す。そして殺されるのだ。

「どうせ死ぬのなら早くても遅くても変わらないのにね」

くすりと魔女に相応しい低い声で皮肉めいた言葉を私は誰にと言わず吐き捨てる。こんな投げやりな言葉を窘めるとしたらたった一人ぐらいなのだが。

「だ、だめだよ、そんなこと言ったら・・・」

無力な自分を虐げるための自虐の言葉だった。こんな醜くて汚い言葉を拾いあげる人間がいるなんて思いもよらなくて私はその人を見た。夕暮れ時の帰り道だった。

人の目には見えない羽入と珍しく外で会話している最中だ。この世界が始まったことに気づいたときは授業中だったので、ここが昭和何年の雛見沢で、今はいったいどういった時期なのかをいち早く知りたかった私が学校の帰り道で羽入に話しかけていたのだが、最後の台詞は独り言で本当なら誰にも聞いてほしくなかった。

その聞いて欲しくなかった最後の台詞だけを悟史に運悪く聞かれてしまった。

「はい」

「ひゃっ」

「ごめん冷たかった？」

雖見沢にそんなに多くの自販機はない。ここから少し離れた場所に商店街とも言にくいが数少ない店が立ち並んだ場所がある。少し待ってと声をかけて悟史は駆けていき、どうしたものかと途方にくらっていた私の頬にぺたりと冷たい異物が押し当てられたのだった。

「みー。冷たいとわかってるのなら当てないでほしいのです」

「あはは、ごめんごめん」

手にしていた缶ジュースの蓋を開けて、私の目の前に差し出す。

結局、あんな不謹慎な言葉を吐き捨てた私は典型的な優等生である悟史に捕まり、帰り道にこうやって時間を潰すことになった。

にしても珍しいことだ。この時期の悟史はクラスメイトである魅音やレナを遠ざけて、一人きりになる時間が多かったはず。そのことを知っている私はあえて悟史にかまうことをせず、できるだけ沙都子を元気づける方に立ち回っていた。

悪戯っぽく笑う顔、目を細めて微笑む顔、そして私を見つめる悟史の顔。差し出された缶ジュースをいつまでたっても手に取らないので悟史はむう、と困った顔をする。

困らせたいわけじゃないのに、その顔を見つめているとどうしても手が動かなくて、それでも彼が困った顔をするから一生懸命自分の腕に命令を出してその缶を取る。

「ありがとう、なのです。悟史・・・」

「もう初夏だからね。いっぱい汗かいたらいっぱい水分取らないと。沙都子も梨花ちゃんも遊び盛りだから」

「沙都子・・・今度、いつ遊べますですか・・・？」

「ごめんね。梨花ちゃんが遊びに誘ってくれるのは嬉しいんだけど。外で遊んだりするとその・・・服を汚すって叔母さんが怒るんだ・・・」

「わかっているのです・・・みー」

だからこそ外ではなく、インドアのゲームである部活へと誘っているのだが、日々叔母の監視は度を増して、悟史自身も皆を避けていることもあって中々遊ぶことができないでいた。

「でも大丈夫だよ。また沙都子が梨花ちゃんと遊べる日がくる。絶対・・・くる」

さっきまで悟史の声色は優しくかった。でも沙都子の話題が出ると段々と元気がなくなり...きっと瞬きをするたびに瞼の裏に叔母に虐められている沙都子の姿は映るのだろう。自分に向かって必死に「にーにー！助けてッ」と這いずってくる沙都子の姿が浮かんでくるのだ。

もう悟史にとって沙都子という名前は知らず知らずのうちに胸を締め付けるだけのキーワードにしかない。そしてそれを認めたくない悟史が否定するだけ苦しみは増していく。

悟史が手にしていた缶がパキユンと音を立てた。

まだ缶に半分ほど残っていたジュースが手にこぼれる。気づかないうちに力が入ってしまったのだろう。自分自身もその音に驚いている様子だ。でも手についたジュースを悟史は拭わない。

私にはそのジュースがああ憎たらしい叔母の赤黒い血に見えた。私は知ってる。この後を知っている。沙都子のいじわるな叔母は頭を割られて死ぬ。目の前の人物に――。

「殺すしか、ないのですか」

「・・・え・・・？」

「梨花っ・・・」

空の上でただじっと黙っていた羽入が咄嗟に出たとはいえいつもはいわない私の台詞に驚いて私の名を呼んだ。でも今は空は見ない。私は目の前にいる悟史を。北条悟史を見る。

「人はいずれ死ぬのなら・・・早いか遅いかだけなのです・・・」

魔女は窘められた世迷い言を繰り返す。そう、人はいずれ死ぬ。早いか、遅いだけ。そこで死ぬのならそれはその人の定められた運命。だってそうじゃない、私自身がそれを示してる。そんなこと言っちゃだめなんてあなたに言う資格はあるの？

・・・もちろんこんなことは言わない。言わないけど、悟史に対するこの呟きにはそういう意味も含めていた。

「悟史は・・・殺す、しか・・・ないと思っているのですか・・・」

「そんなことないよ」

「え？」

「色んな解決方法があると思う。今日、魅音が教室で沙都子を怒鳴りつけて泣いてたよね」

そういえば今日、そんなこともあった。悟史の様子が変わったことを魅音よりも詩音が敏感に嗅ぎつけて、魅音に無理をいって入れ替わってもらったはずだ。沙都子は弁当箱を落としただけで激しく泣いた。平穩であるはずの学校はもうすでに心を休めることができる場所ではなく―沙都子はただ弁当を落とした罪に対しての罰を待つだけの壊れた人形だった。

そんな沙都子を見た詩音が手をあげたのだ。沙都子の華奢な体は教室の床に激しくたたきつけられ、転げた。煽りを受けて倒れた机の中から溢れ出た教科書類はいつの間にか詩音の手の中にあり、振り上げられたと思ったらもう振り下ろされていて、投げつけられた教科書類は沙都子の体に嫌な音を立てながらぶつけられた。

鬼のような形相な詩音はあんたがそんなだから悟史くんが迷惑するんだと力の限り叫んでいた。あんたがしっかりしないから。あんたが悟史くんに頼るから、あんたがいけないんだ！

後から駆けつけた悟史に沙都子は泣きついて、もちろん妹に手をあげた詩音に悟史は怒鳴るのだが、あの詩音が珍しく悟史に言い返した。

「沙都子をいつまでも甘やかすすぎなんだよ！だからいつまでたっても沙都子はお前に頼るんだ！」

そんなこといわれないでもわかってる！悟史の顔は憎しみに歪みながら、でもその顔は決して目の前でいがみ合う詩音を憎いからではないことがわかる。他人への怒りすら悟史は自分の愚かさに向けてしまうから、その重さに耐えられなくなって、でもそれももう限界が近づいているのがわかる。

「魅音が言うこともわかる、わかるんだ、間違っていない。でもあんなやり方じゃよくない。解決しない。僕もカッとなって、うまくいかなかったからその・・・レナがとりなしてくれたけど、僕は・・・その、下手くそだからそういうの・・・」

ふう、と悟史はため息をついた。今日の出来事を思い出しているのだろう。今日のアレは何回経験しても修羅場だった。魅音、いや詩音が椅子を振り上げた瞬間、こんな死もあるのかと何度も思ったものだ。

悟史が飛び込んでこなければ私の頭は粉々に砕かれていたに違いない。詩音は頭に血が昇ると自分を止められないのは違う世界で痛いほどわかっている。

「ねえ、梨花ちゃん。僕も、魅音も不器用なんだ。・・・ね、例えばここにサイコロがあるよね」

私も教室の出来事を思い出して憂鬱になっているのだろうと悟史は察したのか、急に自分の手のひらを差し出した。

「はい」

「サイコロには六つの目がある。例えば、梨花ちゃん・・・沙都子、僕、レナ、魅音、・・・あとひとりいる気がしてならないんだ。むう・・・僕にはそれがだれなのかぼんやりとしかわからないんだけど・・・」

悟史はもしかしたら気づいているのかもしれない。魅音が入れ替わっていること。それは圭一と違いノーヒントだ。詩音の存在はこの時期では本格的に隠されていた。本人が用心していただけに余計に。

普段ぼややんとしている悟史にはわかるはずないと詩音は鷹を括っているが、今の悟史の話を聞いているとそれも怪しい。

そして詩音だけでなく、圭一という人物もこの世界にはまだ訪れていないが存在する。詩音と圭一。彼がいなくなった世界でこの二人がすべてを変えていく。

「サイコロの目の一つどれか、欠けるとする・・・」

真っ黒に塗りつぶされたサイコロ。もうそれは何の目だかわからない。六つの面を持つ本来のサイコロが五つの目しかでないことになる。

「本当ならもうこのサイコロは使いものにならないよね。だって六つの面がないじゃサイコロとしての期待されている機能がもう発揮できないから。だからポイ」

ゴミを捨てるジェスチャーをして普通の人間ならこうするよと悟史は言う。

「でも魅音は違う。欠けた部分を足して補って、本来のサイコロになるようにするんだ」

放り投げたはずのサイコロが手のひらの中にまだあるといったように、何もない手のひらを悟史は見つめている。

「魅いは皆のリーダーだからきっと最大限の努力をするのですよ」

「うん、・・・そうだね。魅音はとても優しい女の子だよ。そして僕と同年の子供なんだ」

どうして魅音があんな行動に出たのか悟史は悟史なりに解釈しているようだった。子供なんだ、という言葉に力をこめて。それは僕もまだ子供でしかない、無力なんだと言いたげだった。

「あんまりこんな話、したくないんだけど・・・僕の心には黒い、悪いやつが住んでる。僕の心にある悪さをしるっていう黒いヤツが言うんだ。園崎家が悪いんだぞ、立ち向かえとか言うんだ」

どこか痛むのだろうか。きっとこんな話をする自分が嫌なのだろう。さっき私が起こしたときのような表情で悟史が呻くように話す。

「・・・普段の魅音ならあんなこと言わない。自分は園崎家の子で・・・僕たちにどうやって接したらいいかわからないと思う。だからせめて学校だけはとを考えて部活というのを考えてくれた。最善の方法っていうのは積み重ねの中で気づいていくものだと思うんだ。部活を考えてくれたっていうのも積み重ねの一つだったと思う。現に沙都子は参加することで魅音との隔たりも忘れてきたみたいだし、新しく転入してきたレナも楽しくしてくれてる」

「そこまでわかってて悟史は・・・悟史は殺すしかないというのですか？」

悟史が消えてからの雛見沢ではまだオヤシロ様の祟りが続く。もちろん悟史自身は心に決めた秘め事を終えてなお妹のそばにいてやりたいと願っているはずだった。

でも違うのだ。私が何回も経験してきた雛見沢では悟史の願いは叶わない。悟史は沙都子のそばにはいられないのだから・・・。

誰かを殺して何かを手に入れるという運命は決して最善手ではなかったはず。そして誰の助けを求めずに自力で解決するには限界がある。それは前原圭一も、竜宮レナも、園崎魅音も園崎詩音も、そしてあなたの妹である北条沙都子も気づいたこと。

彼らがきっかけの引き金を引く数年前。まだ皆の考えが足りなくて幼いときにあなたがいた。

そしてあなたはの中の誰よりも早く自分の犯そうとしているそれがどれだけ愚かなことで、浅はかで最善手ではないことに気づいていたのだ。

「そう、きっとたくさんのやり方がある。色んな人が考えればね。十人十色って言葉、あるよね」

「だ、だったら皆に助けを求めるのです！魅音に、レナに・・・僕に！僕たちはきっと悟史を、沙都子を助けるのです！絶対に！」

「・・・、僕たちは未熟なんだよ・・・梨花ちゃん。皆精一杯なんだ。魅音は僕たちにどう接したらいいのか距離感が掴めない。レナは転入してきたばかりだ。そんなレナにすら助けを求めているなんて情けない話だよね・・・でもこうしている間にも時は流れる。沙都子の悲鳴は続く。僕の耳の奥を破るように・・・胸に・・・ほら、直接声が聞こえてくるんだ」

悟史は両耳をふさぐ、私の声が聞こえないようにしているのではない。自然とその息遣いも荒くなっているのがわかる。だから心を引き戻すために彼の名前を呼ぶ。悟史を呼ぶ。

「悟史ッ・・・！」

「・・・ごめん・・・ありがとう・・・梨花ちゃん・・・でもこの時だけはどうしても変えられない」

一瞬、全てが見通されたようなおぞましい感覚が頭の中を突き抜けた。普段は考えられないのだが、反射的に羽入を見る。羽入は自分の両手で顔半分を覆いながら首を振っている。悟史自身はこの運命の袋小路に気づいていないということなのだろう。

「時だけは変えられない・・・それはどういう意味なのですか？」

額に満ちた脂汗を拭こうともせずに、悟史のあの温かい手が頭全体を包み込んでいく。ゆっくりと撫でられて、でもその手は悲しいほどに震えている。

「僕は北条悟史だから・・・僕は、北条悟史でしかないから」

ゲーム盤でかつて貴方たちを駒でたとえたことがある。それと似たようなことを悟史は言おうしているのだろうか。駒としての自分の役割を察して演じようとしているのならあまりにも酷すぎる。

あなたの役割を口にするなら大事なものを守るナイト。でも悲しいことに守ったはずのものには近づけずにあなただけは朽ちていくことになる。

「飲み終わったかな？じゃあ僕、そこのゴミ箱に捨ててくるね」

「ありがとうございます・・・」

自身の缶と、私が飲み終えた缶を二つ手にし、無意識のうちに缶を揺らして中身が残っていないかを確認する。少し残っている缶の中身を一口悟史は飲んで、私の顔を見るとにっこりと笑って駆けて行った。

彼はもうすぐいなくなる。いなくなり、沙都子は兄がいなくなった理由をあれこれ想像していく。レナはオヤシロ様の祟りだといよいよ疑わなくなる。魅音はその大層な肩書きと打って変わって無力な自分に気づいていく。

北条悟史は段々と思い出に刻まれていくけれど開いて閉じて読むたびに苦しいから読むことをやめられてしまい、忘れることで痛みから何も覚えようとしてくれなかった皆の悲しい文字通り、「思い出」に変わってってしまう。—思い出すことで痛みを伴う、出来れば思い出したくない「思い出」に。

どうして、なぜ、こうなってしまったのか。単純で明快な答えがあったのに、出来すぎているからこそなのにな。

まるでコロンブスの卵。悟史が困っている原因や沙都子が悲しむ理由もわかっている。でも物事はそんなに簡単ではなかった。足し算引き算のように1が足りなければ足せばいいわけでもなく、引くことで釣り合いが取れるわけではない。だから余計に私は自分が置かれている現実が、繰り返し続けるこの世界が嫌になる。

綿流しの日はもう少しだ。悟史はこの時期になると色々準備を始める。雛見沢ファイターズから自分の金属バットを借りた。

あともう少ししか時間は残されていない。

「ねえ羽入。悟史の叔母殺しを止めることはできないのかしら・・・」

「悟史の叔母殺し、ですか？とても難しいのですよ。今までのカケラでも叔母が殺害されなかったケースはないのです」

「むしろ叔母が殺害されることにより沙都子の精神状態が一時的回復・・・皮肉なものね悟史がいなくなることによって沙都子が救われて、それをきっかけに沙都子が変わっていきなんて・・・」

「どんな変化にもきっかけは必要なのですよ」

「じゃあ悟史が叔母を殺すことがきっかけで沙都子が救われるっていうの？」

「それだけが全てとは言いませんですが・・・少なくともきっかけの大きな原因になっているのは確かです。梨花、この世界を幾度なく繰り返しているのは僕だけではないはず。気づいているのに気づかないふりをするのはもう意味のないことでしかないですよ」

悟史の罪を見て見ぬふりするな、ということなのか。

「僕たちの力では綿流しの時期に起きる“オヤシロ様の祟り”自体はもう止められないのです。わかるのはその事件が続いたあとに梨花が殺されているということ。そして僕たちはその運命を止めなければならない」

「わかっている。わかっているけどッ・・・だって私は誓った。誰ひとり欠けることのない世界で、この世界を超えてみせる！そこに悟史がいらないなんておかしいじゃないっ、おかしいのよ！」

「梨花。悟史はいますですよ、生きてます。ちゃんと一緒に運命を乗り越えます、梨花が生きていれば・・・」

「違うの。違うのよ、私が言いたいのはそうじゃなくて・・・」

圭一は仲間を疑い仲間を信じ仲間を救おうとしてその手を染めた。何回も間違いを繰り返しながら、手を血に染めて手に入れられるものが最善の答えじゃないことに気づいたじゃないか。この世界だって悟史が自分の手を血に染めて繰り返すことによって成り立ってる。だったらなんで圭一のように悟史は気づけない？叔母を殺して、殺したあとに一体何が残るといいのか。殺したら絶対その罪に苛まれて生きていくのだろう。殺してしまったことに必ず心は縛られ壊れてく。別の世界でのレナがいい例だ。

遠くから悟史が歩いてくる。日は落ちようとしていて、彼の影が地面に映り伸びていく。その影を踏むようにして悟史が歩いていく。影を踏む彼の表情を見て、私は理解する。

ああ、そうか。

「殺すしかないのですか？」と私が聞いたときに、悟史は言っていた。「そんなことないよ」と。

——気づいていたじゃないか。あんなにも優しい顔で応えてくれたじゃないか——。

もちろん叔母を殺した後は沙都子と二人で頑張るつもりだったかもしれない。何にしろ今の悟史は叔母を殺した後のことは考えていないし、その後を知るのは私だけなのだ。

だから今の私がこんな問いを重ねたところで無駄なのかもしれない。無駄・・・？

「梨花ちゃん、そろそろ帰ろうか」

「あっ・・・はい、こんな遅くまでごめんなさい、なのです」

「気にしないで。それより何か悩んでることあったかな？」

「え？」

「うーん、僕の気のせいならいいんだけど。梨花ちゃんはいつもよりどこか遠くを見ている気がするんだ。まるで時を超えて未来をみてるような・・・て、SF小説の読みすぎかな？僕」

「みー・・・僕の見ている未来には皆一緒に・・・皆が手をつないで歩いているのです」

「うん？」

「レナが嬉しそうにしてて魅いと詩いはいつものようにケンカをしていて・・・、その隣に僕と羽入がいます。その真ん中に、罰ゲームを受ける圭一がいて、そんな圭一を見下すいつもの調子の沙都子と、それをなだめる悟史。あなたがいますです・・・。」

「むう・・・僕の知らない人もいるね。もしかしたらこれから転入してくるのかな？」

「はい。そうなのです、転入してくるのです。だから悟史も・・・悟史も、一緒に迎えてあげてほしいのです・・・」

「もちろんだよ、友達が増えるのは嬉しいから。僕も沙都子も歓迎するよ」

「悟史・・・」

その手を掴む。思ったよりも華奢で白い手は沙都子をたくさんものから守ろうとして傷ついた。もちろん外からわかる傷よりも見えない傷の方が多いだろう。この手はいづれ血に染まる。真っ赤に、真っ黒に。もう彼は決意している。こんなに優しく誰よりも思いやりのある人がどうしてこうも過酷な運命を背負っているのだろう。

「・・・もう決まっている、ことなのです・・・」

「うん・・・」

「・・・何もできない無力な僕を、・・・許してほしいのです」

「・・・うん・・・」

彼は何も言わずに私の言葉に力なく何度も頷いた。もしかしたら沙都子の悲しい叫び声にも今はもうこうして頷くことしかできなくなっているのではないだろうか。

「おうちまで送るよ」

「いいのです・・・今は沙都子のそばにいてあげてほしいのです」

つないでいた手を私が離す。気を使われたと思った悟史が顔を一瞬俯いて、小さな声で、ありがとうと呟いた。じゃあ、またねと悟史が歩いていく。その後姿はとても哀しく、兄としてはとても誇らしく、道を違えていることに気づきながらも進まなければいけない苦しみを背負っているように見えた。

「悔しいわね」

悟史の姿がすっかり日に吸い込まれて消え見えなくなったあたりで、私はまた羽入へ向かって言葉を投げる。その声が聞こえているのか聞こえていないのか、ただ姿だけを宙に浮かせる羽入に私は追い討ちをかけるように続ける。

「だってそうじゃない。こんなこと間違いだって彼は気づいている。私たちだって気づいている。でもそれを止められないなんて・・・」

話しかけられているのが自分だということを再度押し付けられて、羽入は慌てた様子で返事をする。

「で、でで、でもこの悟史の事件をきっかけに皆が成長していくのです・・・」

「ええ・・・そうね・・・」

沙都子はいなくなってしまった兄の原因が自分であることに気づき、魅音は自分が力になれなかった非力さを嘆く。レナは自分が一番近い場所にいることに気づきながら何も出来ず、詩音は悟史の助けにすらなれなかった自分を責めていく。

「それに、悟史は十分奇跡を起こしているのですよ？」

「奇跡・・・これが？」

「気づきながらも抗わず・・・ただ愚直にその道を進んだ。歴史というものがあるでしょう？」

「最初は雛見沢の歴史にこの運命に抗うヒントがあるかもってよく読んだわね。でも結局何一つ参考にならなかったわ」

「歴史は人の業が積もった愚かな軌跡です。後の世の人はそれを伝え聞かされ読んで、正しければ褒め称え、間違いには先の人とはなんと愚かなことをしたのだ、情けない、私ならこうしたのにとそのときの出来事を責めるかもしれません」

「そうね・・・～たら、れば～という言葉を繰り返したらキリがないけど」

「でも先の人が重ねた出来事があったからこそ過ちであれなんであれ今があるということも忘れてはならないのです」

羽入の言いたいことはわかる。どんな出来事にも意味があるということだ。どんなにちっぽけで関わりのないことだと思っていっても、それが実はとんでもないきっかけを与えていたり——新しい道を開くことになっていたりする。

私はそれをこの百年の旅で嫌というほど味わってきたじゃないか。

「だからたとえ後の世で悟史が選んだ道がどれだけ愚かで最善手ではないと気づいても僕たちが悟史の残した想いのカケラを紡げば・・・出来事は残ってしまったとしても・・・運命は打ち破れると僕は思うのです」

「じゃあ、あんたはこの悟史の事件は必然、っていいたいのね」

「出来事に偶然はないのですよ。全ては必然の上で成り立っているのです。別の世界で圭一がレナと魅音を殺してしまったこと、これも一つの必然。詩音が魅音と入れ替わって仲間を殺してしまったこと、これも必然。レナが宇宙人を信じ込んで学校を占拠したことも必然。そしてこのレナに自分を取り戻させたのも圭一が学んだことによる必然・・・と思いましたが正直あれには僕もびっくりしたのです。いつもなら学校は大爆発でドカーン！」

「私は黒コゲで焼死だものね、結局殺されてしまったけど・・・」

これだけ饒舌な羽入を見るのは久しぶりだった。

「梨花、この世界は何かが違う。わかりますか？」

「・・・悟史が叔母殺しをするのはもう決まってる。四年目の祟りがあって、あるとすれば圭一が引越してくることかしら。いつもと変わらないとおもうけど」

「梨花の心が違うのですよ」

「・・・私の、心・・・？」

「あなたは悟史が間違えた道を歩むことを拒んだ。後の世で圭一が悟史の疑心暗鬼に身を重ねたり、レナが起こす事件の引き金になったり、沙都子が助けを欲することを拒否する原因になったり、詩音と魅音が互いの不遇を拗らせる原因になったり。そう。悟史の事件が全てを狂わせる魔力の一つを持ってる」

そうだ。今までの世界で起きたすべての出来事を過去へと辿ってみれば悟史の事件がきっかけの一つになっていると考えてもおかしくはない。

「全ては零に戻り壺を数えていると梨花は思っているかもしれない。でも、もしかしたらこれは四なのかもしれ

ない。振り出しに戻っているわけではないかもしれない」

そういえば、私が悟史に叔母殺しをやめさせたいといったのはじめてだったかもしれない。先ほどの羽入の話の方が当たり前だと思っていた。悟史が叔母殺しをするのは必然で当たり前のこと。もっといえば、いじわるな叔母など消えてしまえばいいと心のどこかで思っていたのではないだろうか。

「だから梨花は悟史の話を聞こうとしなかった。彼がどんな想いで心を縛られ、どんな気持ちで沙都子を守ろうとしていたのか知ろうとしなかった」

「知ったところで覆せないと思っていたから・・・」

「今の梨花は彼のそんな儚い気持ちに触れて変えたいと願った。でも願いは願いにしかならず・・・叶わぬことの方が多い」

日はすっかり沈んで、月夜が仄かに世界を照らし出す。空に浮かぶ羽入は私と同じようにその月を見上げる。「でもこれは梨花一人の願いごと。学んだではありませんか。知ったではありませんか。信じる力こそが全ての運命を覆す。悲劇など知るか、惨劇など知るかと圭一も力強く叫んでいたではありませんか。だから今からでも遅くない。悟史の想いを紡いで、皆の想いを紡いで。願いを一つにして、より心を強くして、この運命を打ち破るのです」

時は過ぎる。毎夜見上げるこの月も満ち欠けを繰り返し、微かな移動を繰り返しているのだろう。毎日毎夜この時間に見つめていてもその動きに気づくことはできない。

それは私が気づけないからなのか、それとも気づかれないようにしているからなのか――。

綿流しの夜。やはりその事件は起きた。沙都子の意地悪な叔母は頭を割られて死んだのだ。彼のあの人を撫でる優しい手は人を殺めた手になってしまった。沙都子の両親の事件も悲劇というのなら、これもまたあの悲劇を引きずった避けられない悲劇。

私は悟史がこれからどうなるかを知っている。知っているのにそれに抗いたくて、いつものように彼が辿る足取りを先回りする。

「・・・大きいぬいぐるみですねえ・・・」

「魅音」

片手に包帯を巻いた魅音。いいえ、詩音。その手を隠しながら、おもちゃ屋のショーウィンドウを物欲しそうに覗く悟史に声をかける。

私はその様子を少し距離を置いて見ている。二人の会話の内容を羽入が聞いている。こうやって二人がおもちゃ屋のショーウィンドウを見つめているのは、悟史が沙都子の誕生日に大きなぬいぐるみを買ってあげようとしているからだ。そしていつまでもショーウィンドウの前でウジウジしている悟史に呆れて詩音が予約をしようと腕を取りおもちゃ屋へ入る。

全てはいつもの通り。早く予約すればよかったと安心した顔で出てくる悟史、なぜそうしなかったのと責める詩音も安心する悟史の顔を見て自分のことのように胸をなでおろしていた。

でもそれも束の間。じきにオヤシロ様の使いが姿を現す。ここから全てが狂いだすのだ。悟史が鬼隠しに遭うまでもう時間はない。

私は暫くオヤシロ様の使いが現れるの待ってからその場を去ろうとしていたが、いつまでたってもおもちゃ屋の前で談笑している二人の間を割ろうとする者はいない。

「・・・羽入、どういうこと？」

不思議に思った私が、二人の近くで様子を伺っていた羽入に向かって疑問めいた表情を浮かべる。無言で羽入はあうあうと取り乱している。それから呟く。

「あうあう・・・いつもと違うのです・・・」

「でも悟史は叔母を殺したのよね？」

「あう・・・そうなのです。あの時、確かに悟史は叔母を殺したのです。そのせいでもう末期症状を迎えています・・・」

「そして悟史を疑ってあの男が現れる。そうよ・・・大石が・・・」

考えろ。よく考えろ。まず何かがおかしい。いつもと食い違っている。確かにこの場面は何度も見ている。それはさっき自分の頭の中で繰り返した通りだ。何が違う？何が食い違っている？考えろ、考えるんだ・・・。

「詩音の手・・・！」

「あう・・・手、ですか？」

「よく見て、あの手。包帯を巻いてる。詩音がケジメをつけさせられるのは悟史を庇って大石に自分が魅音の双子であることを暴露して園崎家につれていかれるからよ。それがもう爪を剥がされて？・・・それでも悟史がまだここにいるってことは・・・」

「ありえないのですよ？だって詩音は暫く興宮に近づきすらできないのです。住むことが許されて、おもちゃ屋へ1人でやってきてあのぬいぐるみがなくなっていることを知り・・・さらに大石から悟史が失踪したことをやっと知ることができるのです」

「じゃああの爪は何なのよ。詩音は何のために爪を剥がしたっていうのよ。どうみてもあれはケジメをつけた跡じゃない！」

あう、あう、僕にもそんなことはわからないのですよ、羽入は繰り返す。わかってるわかってるわよ、私だってわかってる。羽入がわからないんだから私もわかるわけじゃない。

でもこれはいつもの繰り返しと違うんだ。一体なぜ？何が違ってこういう結果になったというの？

「よかったですねえ、予約できて。いつまでたっても悟史くんウジウジしているんだもん。もうドキドキして仕方なかったですよ」

魅音が言う。僕がいつものようにショーウィンドウに額をくっつけてため息をついていたのをいつから知っていたのだろう。そんな姿を見られていたのかと思うとなんだかとても恥ずかしい。

「いやあ、こんなに簡単に予約できたらすぐにしておけばよかったよ・・・」

思わずクシャクシャにしまった予約票をもう一度、手のひらに広げる。もちろんこれを引き取りにこなくてはいけない。バイトがもうすぐ終わって、・・・もう一つの出来事も、やり遂げた。もう僕たちを邪魔する奴らはいない。やっと幸せになれる。なれるんだ。また一つ、大きなため息をつく。

ため息をついたところをまた見られてからかわれやしないかとふと、予約票から顔を上げて隣にいる魅音を見る。あ、これ可愛いと今度は魅音が両手をついてショーウィンドウの先にあるふわふわとしたこう・・・女の子が好きっていうのはこういうのだろうなというような人形を指差している。

僕は人形を見てすこし笑みがこぼれた。それからその人形を可愛いと指差す魅音の手を見た。

その手は包帯で巻かれていた。包帯は割りと新しめだけれど、指先からわずかに血がにじんでいるのが見えた。

その手の先には白い腕があり、その腕の先には魅音の体があつて。いつもの魅音の服装なのだけれど、僕の知っている人とは違うのだ。だから僕はその知ってる人のために用意された名前を口にする。

「しおん・・・？」

「はい？」

その名前が口から出ると、自然と僕の目の前にいる魅音はその名前に応じた。

「え？あれ？今悟史くん、なんて？」

返事してすぐに、あ、いけないなんて顔に出すのはいつも何かを失敗した魅音の態度と変わらない。

そして無意識のうちに自分が伸ばしていた手に巻かれている包帯に気づいて、慌てて手を背中に庇うように隠した。次になんて言葉が続けたらいいのかわからないのだろう、不思議そうに僕の顔を眺め、なんだかバツが悪そうにしている。

「・・・僕と初めて会ったとき・・・」

「え、・・・あ、学校で、かな・・・？」

魅音との出会いはそうかもしれない。当時の僕は自分たちを苛め抜いている園崎家の娘だと知って表面上では笑顔を装っていてもどこからか憎しみが湧いてきていた。そしてそんな自分が悔しかった。疑うことや憎しみを持つことのほうが容易くて心が軽くなるなんて信じたくなかったから。

「ううん・・・僕と初めて会ったとき、髪を下ろしてたよね・・・」

「へ・・・そ、そうでしたっけ」

あくまでも認めようとししないのはやっぱり魅音だから？僕は少し笑いながら、続ける。

「ねえ、しおんってどう書くの？」

「うたの詩に、おとの音・・・」

また詩音が驚いた顔をして素っ頓狂な声をあげる。もう僕を騙せない。いいや、詩音は騙したりなんかしてない。僕が勝手に勘違いをしていただけなのだから。

「ご、ごめんなさいごめんなさい・・・私、ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「いい名前だね」

「え・・・」

「詩音っていうんだ？」

「どこで名前を知ったの？・・・まさかお姉から聞いた？」

「まさか、魅音は嘘でもそんなこといわないよ」

「じゃあどうして？」

「わからない。どうして僕が君の名前を知ってたのか・・・でも、ここに」

胸をとんとんと叩く。少し前だ、梨花ちゃんと話をしたとき。殺すしかないのですか、とこれから何か起こるかを予想していたように尋ねた梨花ちゃんに僕は応えた。「そんなことはないよ」と。

色んな人に相談して色んな考え方をすれば、もっと違うやり方があった。自分の手を血に染めて、手に入れた未来なんて長続きはしない。きっと色もつかないうちに崩れて粉々に砕けてしまうだろう。

それでも僕は北条悟史だったから。

僕にしかできないこと、沙都子がただ擦り切れてしまうのを待つことなんか僕にはできなかった。だから僕にしかできないことをするしかなかった。

「ここに君の名前があったんだ。詩音っていう名前が」

「・・・悟史くんは超能力者ですか・・・」

「あはは、違うよ・・・ねえ、詩音」

「・・・あの、もしかして、怒ってます・・・？」

少し僕が顔を強張らせたので、詩音が視線を合わせづらいといった様子で僕から目を離す。僕は目を閉じて。それからゆっくりと罪を犯してしまった手で許すを乞うように詩音を撫でた。もう、誰かを撫でたり慰めたりする資格なんかないのに。もしかしたら・・・自分自身を許して欲しくて、彼女を撫でたのかもしれない。

そんな僕の手を払わずに詩音はただ受け入れ、肩を震わせてボロボロと涙を零すのだった。それはもう痛々しくて、泣かないでなんて止める言葉すらかけることもできない。

「・・・どうして、泣くの・・・？」

「悟史くんが・・・泣かないから・・・」

「・・・どうして僕の代わりに泣いてくれるの・・・？」

「じゃあどうして悟史くんは我慢ばかりするの・・・どうしていつくれなかったの・・・？」

僕のために怒って泣いて。詩音は僕の鏡だった。

「悟史くん・・・頑張ったね・・・すごく頑張ったよ・・・誰にも負けない、強い心で・・・あなたは立ち向かった・・・」

僕より少し背の低い詩音が全てを振り払うように胸に飛び込んできて、それから僕をゆっくりと抱きしめて頭を撫でた。

僕はいつもこうやって沙都子を慰めていたのだろうか。

慰めながら、慰めてほしいと思っていたんだろうか。

気がつくやと頬をなぞり落ちてくるものがある。それを咄嗟に拭おうとして僕の手がゆっくりと詩音の頭から離れる。もうずっと忘れてしまっていた。こんなものは僕の中で枯れ果てて消えてしまったのだと思っていた。嫌、嫌だよと詩音が頭を振る。言うことを聞かない子供みたいに・・・そう、沙都子みたいに・・・。僕は沙都子のことを一番に考えているようで考えていなかった。詩音の優しさに気づいているようで気づいていなかった。こんなにも僕のこと泣いてくれる人がいることに今頃気づくなんて、なんて僕は馬鹿なんだろう。

ただ、こぼれて落ちて。全部を上手に救うことなんかできなくて、僕は自分の不器用さに悔いながらただ肩を震わせることしか今はできなかった。

「結局・・・同じなのでしょうか」

様子を窺い知る羽入が私に向かって疑問の答えを求めてくる。私は二人の姿を見ながら、羽入を介して聞いた二人の会話をもう一度頭の中で繰り返す。

「これが同じに見える？」

「あう・・・でも結局、同じだと思うのです。おそらくこの後、悟史はぬいぐるみを引き取るために入江に車を出してもらって、そのまま発症してしまうのです」

「ねえ羽入、あんた泣いたことある？」

「泣く、ですか・・・ううん、最初は梨花が辛いを思いを繰り返しているのを見て・・・でもなんだか涙が枯れてしまったというか・・・そんな感じです・・・」

「私もよ。でも見て、あの二人を見てたらなんだか・・・」

「あうあう、梨花？なんですか、目が・・・目が痒くて・・・」

「ねえ羽入・・・」

「なんですか？」

「泣いた数の分だけ、人は強くなれるかしら・・・」

「わからないですけど・・・今回の世界はいつもと違うのはわかります・・・。これまで繰り返してしまった出来事は変わりませんが、これから圭一が引っ越して僕たちが積極的に動けば変わるかもしれません」

「やっぱり圭一に頼るしかないのね・・・悟史は自分の役割を演じただけの悲劇の役者・・・？」

「そうなるかならないかはこれからの皆の意思の強さにかかってます」

「うん・・・？」

「僕が知ってる世界でいつもと違うのは悟史が最後に手を伸ばしたということです。これはきっと、悟史を助けるのに必ず役立ちます。最後の最後で悟史は自分の本当の罪に気づけたのです」

「そう・・・でも、だとしたらもっと早く救い出す手立てはなかったのかしら」

「梨花。いつかの世界で魅音が言っていました。人は生きている限り業を背負っていくものだと。そしてそれは当たり前なのだと。無菌室で育った人間もない限り、人はそんな俗世に生きていくものです。罪を大きさで図ろうとも心を縛るのは同じ。ただそれに気づけるかどうかなのです」

そう・・・これは自分の罪を打ち明けた圭一に魅音が掛けた言葉。

罪はけして滅ぼせない、後悔しても、その罪は自分を縛りつけ、他人を疑わせる。隠し事をするなんて仲間じゃない。疑心に囚われたレナの言葉に一度は膝をついた圭一も、魅音のこの言葉で涙を流して自分を取り戻した。

泣くことは恥ずかしいことでも、負けを認めることでもない。

自分を許すことなのだ。

そして相手を想って流す涙、それは痛みや苦しみを、心をわかちあうからこそ流れる涙なのだ。

遠くで悟史が泣いているのが見えた。悟史が泣いているのなんて初めて見た。この世界でようやく今になって彼は涙を流すことを許されたのかもしれない。

「罪に気づいたのなら最後にすばらしい人間になればいい。そうittaっていたではありませんか。そしてそれは悟史も例外ではありません。さあ、梨花。行きましょう、僕たちの戦いはこれからです。運命に抗い、打ち破ろうではありませんか！」

「・・・あんた、鼻が真っ赤よ・・・」

「あうあうあう！？これは梨花が泣いたりなんかするからなのですよ！ぼぼぼくは神様なので泣いたりなんかしないのです！」

「別に、神様が泣いてもいいと思うけど・・・あんたなんかいつも謝ってばかりだし・・・」

「そんなことないのです、ひどい、ひどいのですよ梨花あ！」

遠くで髪を下ろした詩音の姿が見えた。もう偽らなくてもいい。悟史に言われたのだろう。そして何かを必死に悟史に訴えていた。もう詩音は気づいているのだ。誰が叔母を殺したのか。いや詩音だけじゃない。状況から誰が考えても悟史がやったとしか思わないだろう。

「迎えにいくから！」

圭一が引っ越してくるまで、あとは同じ。そう思って背を向けた私の耳に詩音の叫ぶ声が聞こえた。これはどの世界でもいつも聞こえてくる詩音の悲鳴にも似た叫び声。でもこの声は、いつも詩音の内なる声だった。だか

らきっと悟史には届かなかった。それは一方から伸ばした手だったから。

片方がどれだけ手を伸ばしても、もう片方が手を伸ばさないと意味がない。それは果てない世界を繰り返して気づいたことの一つ。

「必ず・・・悟史くんのこと、迎えに・・・いきますから・・・ッッ」

今は悟史が伸ばした手を必死で掴もうとしているのは詩音の手。伸ばせば伸ばすほど遠くに、力を入れれば入るほど腕は歪んで揺れて、目の前にあるのにそれを上手に掴めない。

詩音のことだ。大石が嗅ぎつけていることはもう園崎家経由で知っているだろう。悟史が大石に捕まればすぐゲロしてしまうのは予想がつく。だからきっと匿ってあげるとか、逃げようとか、そういう話をしたに違いない。

でもきっと悟史は困ったように笑ってこう言ったに違いないのだ。

「もう少し待っていて。もう少しで沙都子の誕生日だから。もう少しで終わるから・・・」

お互いの指先は触れたのに。指と指は絡んだかもしれない。でもその指を、ゆっくりと悟史が解いていく。

あの大きなぬいぐるみ、さっき二人で予約したじゃないか。そのために悟史くんは必死でバイトをしてお金を貯めていた・・・もう園崎家ではケジメをつけた。悟史くんには手を出さないって約束させた。だから大丈夫。大丈夫だから、今は悟史くんの優しい気持ちを大事にしてあげよう。そんな辛いことじゃない。だってほら、空は続いてる。顔は見えなくても、空を見上げればきっと同じ空の下にいてることを実感できるから。今度はきっとあなたを信じる。だって「待っていて」とあなたは言ってくれたから。

私、待つよ。

・・・でもね、遅かったら私迎えにいくよ。

だって私、あなたの困った顔が好きだから。

どうルーレットが回っても、運命は抱き合わせというものもある。

悟史が叔母を殺したということこそ本当に定められた運命だったのかもしれない。

でも私たちは負けない、挫けない。

当たり前のように起きていた出来事にだって意味があった。そしてそれを当たり前だなんて思っていたことが百年も生と死を繰り返した魔女の傲慢だった。

一つ一つの世界に皆がいた、確かにいた。

そして皆にはその世界しかなかった。限りがあったのだ。限りがあるこそ抗い、ひたすらに信じて、生きようとした。

悟史は繰り返す世界の中で、自分の罪に気づきながら、誰にも許しを乞うことができずにいた。

自分で気づけないことは多すぎる。それが限りのある世界なら尚更だ。

私は自分の運命を打破することに夢中になるばかりで、何回も何回も繰り返し機会を与えられているのに彼の罪に気づいてあげることも、救いを与えることもできなかった。

それが今回は少しだけ、違う。

悟史が何を想い、どうして叔母を手にかけてのか―ただ雛見沢症候群という病気と沙都子を守りたい、単純な動機から犯してしまった罪なのだと考えていた。

殺すしかなかったのですか、との問いに悟史は私が毎回解釈していた自分勝手な思いを一気に断ち切らせた。気づいていたのだ、自分は間違っていると。そして助けて欲しかった。誰かにそんな恐ろしいことを考えている自分を止めてほしかった。

助けて欲しいのに、彼は涙を忘れてしまった。助けを求めるということを忘れてしまった。

だからそんな悟史のために、詩音は怒り、泣いた。

雛見沢という土地から一線を引き、しがらみのなかった詩音は悟史の助けてほしいと泣いてる声が聞こえたのかもしれない。

もしかしたら、妹が声をあげて泣いているのを彼女は臍げに覚えていたからかもしれない。

私が助けてあげないと。胸の奥に、妹を助けてあげたいと想う気持ちが詩音のどこかにまだ残っていたのかもしれない。ああ、また詩音が泣いている・・・助けなくては、と。

あの後、悟史はアルバイトでお金を貯めてぬいぐるみを買うことができるのだが、大きすぎて自転車に入れることができず入江に電話をかけて、大きなぬいぐるみを運んで欲しいと頼んだ。

その車中で羽入が言う通り発症してしまうのだが・・・入江は危険ではない、ただ深い眠りに落ちているだけだ、泣き叫び、疲れた子供が反動的に深い眠りに陥った・・・そのようなものと説明していた。

雛見沢症候群の検査結果はやはりL5。叔母殺しの罪は抗えない事実。

だけど悟史の流した涙はこれから先に待ち受ける運命を打破するための強い絆になる。一緒に翻弄される仲間たちと悟史の想いを無駄にしないように胸に灯した強い意思を紡いでいくしかない。

誰かの揺るぎない意思でこの運命はビクともしない。

でもその運命を私たちは受け入れない。

「迎えにいくから」と詩音は言った。そうだ。迎えにいこう、悟史を。今こそ反撃の狼煙をあげよう。

これから雛見沢に新しい仲間を迎えて、時は動き出す。

「僕も逃げることはやめました。もう見ていることしかできない無力な存在ではいたくないのです」

「あら、1人で半ベソかいててもいいのよ？あんたが泣くとなんだか泣きたくなるんだけどね」

「あ、当たり前なのです、僕と梨花は五感を共有しているのですから」

「嘘よ、う・そ。私は私、あなたはあなた。これからそうやって生きていくのだから。さあ、行こう」

羽入の手を取る。

いつもなら透き通ってしまうその手をしっかりと一瞬だけ・・・握ることができた。温かい、人が生きているという証。なんだかわかる。

私たちはやり直せる。

そこには皆がいて、楽しい毎日が待っている。

全員が気づけた奇跡を今こそひとつにしよう。

だから皆で生きる、たどり着いてみせる。

——そう、ひぐらしのなく後も。